

町家の屋根越しから見え隠れする八坂の塔の力強い姿は、この地域のシンボルとして重要な歴史的風致の構成要素となっている。



写真2-3 八坂の塔

懸崖造の本堂（国宝）で有名な清水寺は、「清水寺縁起絵巻」によると、鹿狩りにきた坂上田村麻呂が、この地で修行中の延鎮に殺生を戒められ、延暦17年（798）二人で千手観音の像をつくり、一堂を創建したのが始まりとされる。幾度もの焼失と再建を繰り返したため、室町後期に遡る仁王門、馬駐が最古の遺構である。現在の伽藍は、寛永期に徳川家光の援助により再建された本堂、三重塔などが中心となっている。北法相宗の本山であり、また、観音信仰の盛隆にともない、近世には西国三十三所札所となった。線香の煙が漂う本堂の中で手を合わせる巡礼者も多い。他にもこの地域には、名所や旧跡が数多く存在する。

清水寺の表参道は、昔から清水坂とされており、都からの参詣者は、五条通（現松原通）から五条橋を渡り、清水坂を上る道であった。近世になると、八坂神社から産寧坂に至る参詣道が、東山めぐりの主要な道の一つとなり、道の賑わいは、洛中洛外図や東山遊楽図にも取り上げられた。その後二年坂が登場し、現在の参詣道へとつながっていった。これらの参詣道には茶屋などが多く立ち並んでいたが、天保14年（1843）の記録「諸商売人別御改書」には、清水門前町において茶碗商売や茶店、人形屋などがあったことが示されており、この頃既に参詣客目当ての土産屋などが形成されていた様子が分かる。

現在、この参詣道に当たる産寧坂や二年坂付近

は、江戸時代から昭和初期までの伝統的な建造物が立ち並び、歴史的な町並みを形成している。それらの伝統的な建築物の店先で、京人形や清水焼等の伝統工芸品を販売する土産物の店舗が営まれている。中には、今なお店の奥で伝統工芸品を生産しているところもある。

このように、一帯は寺社をはじめとしたいくつもの名所があり、それをつなぐように参詣道が形成されている。そこには、土産物の店舗の店先に工芸品が並べられている風景があり、歴史的な町並みに彩りをもたらし、参詣道を行き交う参詣者や見物客等の人々に、古都の風情と心の安らぎを感じさせている。

(ウ) 下鴨神社と糺の森

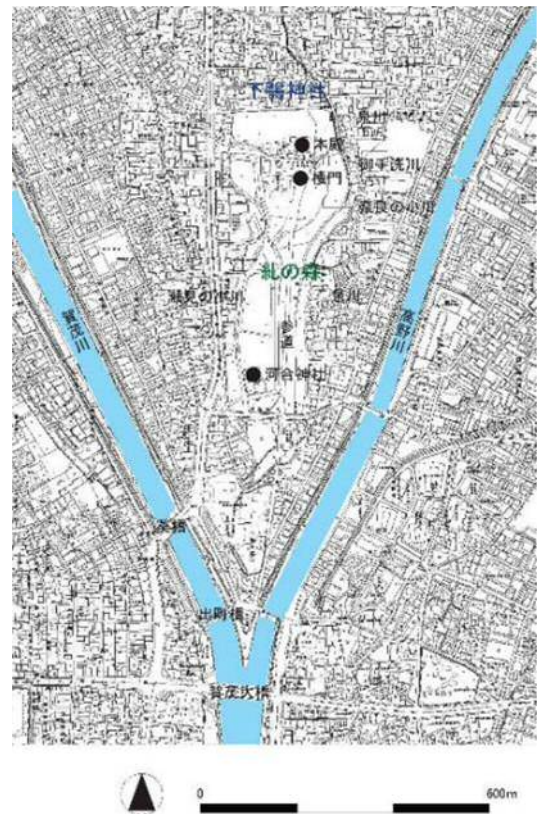


図2-6 下鴨神社と糺の森

下鴨神社は、鴨川と高野川にはさまれた、二つの川が合流する場所にある。上賀茂神社とともに、この地を占有していた古代の賀茂氏の氏神を祀る神社であり、両社をもって一社のような扱いをされてきた。わが国最古の神社の一つである。

糺の森は、下鴨神社の境内にあり、社叢としての役割を果たし、自然崇拜の場となっている。